

0-28 ガイドラインの変遷に伴う当院におけるカテコラミンの使用量推移

○結城沙英子、河合飛佳、大城里紗、有賀千温、白土枝里子、鹿島彩絵、植木彩、馬場奈津美、若林よう子、坂井良美、前原大輔、土井本和久、福田朝恵、瀬川和子、垣尾尚美、國東ゆかり
(加古川医療センター 薬剤部)

【目的】

様々なガイドラインがある中で敗血症性ショックのガイドラインは、国際ガイドライン Surviving Sepsis Campaign guidelines (SSCG)の他に、日本版敗血症診療ガイドラインがある。

SSCG2008 で推奨されている循環作動薬の第一選択薬は、ノルアドレナリン (NAD)あるいはドパミン (DOA)の2剤であった。その後、2012年に改訂されたSSCGで推奨されている循環作動薬の第一選択薬はNADの1剤のみに変更された。また、2013年4月に発表された日本版敗血症診療ガイドラインでも、血管作動薬の第一選択薬はNADの1剤のみとなっている。

今回、ガイドラインの変遷に伴うカテコラミン使用の変遷を検討したので報告する。

【方法】

調査期間は、2010年1月1日から2014年12月31日までの5年間とした。

対象症例は、当院でNADあるいはDOAを使用した患者である。

検討項目は、対象症例を救命救急センターと一般病棟に分けて抽出し、敗血症性ショックの治療目的にカテコラミンを使用した患者数割合とカテコラミンを使用した全患者数割合をそれぞれNAD単独群、DOA単独群、NAD・DOA併用群の3群に分けて推移の比較・検討を行った。

【結果】

敗血症性ショックの治療目的にカテコラミンを使用した患者数割合において、NAD単独群は、救命救急センターでは2010年から堅調な増加が見られた(図1)。一般病棟では、NADのみを第一選択とするガイドラインが発表された後の2013年に顕著な増加が見られた(図2)。

カテコラミンを使用した全患者数割合の推移は、救命救急センターと一般病棟ともにNAD単独群は増加傾向であり、DOA単独群は減少傾向であった。

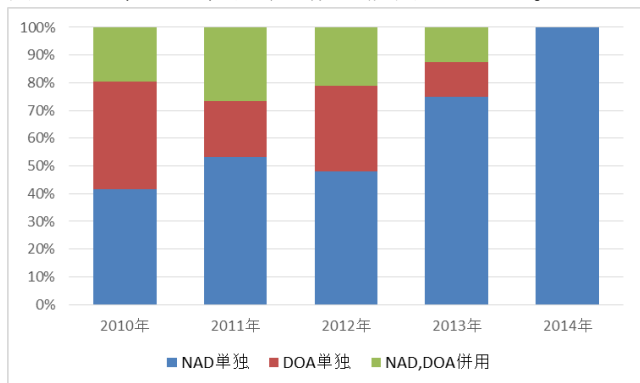


図1 敗血症性ショックの治療目的にカテコラミンを使用した患者数割合(救命救急センター)

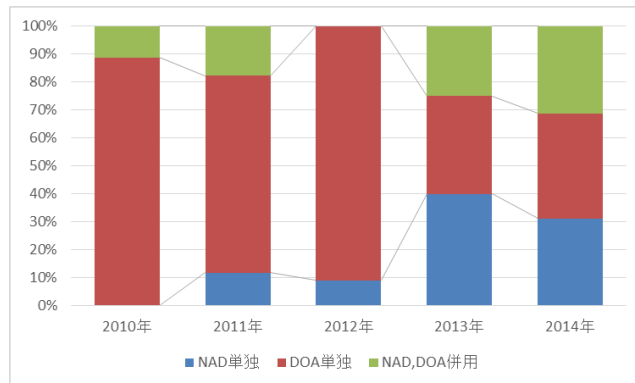


図2 敗血症性ショックの治療目的にカテコラミンを使用した患者数割合(一般病棟)

【考察】

敗血症性ショックの治療目的にカテコラミンを使用した患者数割合は、救命救急センターと一般病棟のどちらにおいてもNAD単独群が年々増加傾向であった。増加時期に違いがみられた理由としては、救命救急センターは敗血症性診療に触れる機会が多く、ガイドライン化される以前にその知見を応用していたと考えられる。また、一般病棟では日本版敗血症診療ガイドライン発表後に変化が起きていることから、これは診療ガイドラインが非専門医に与えるインパクトの大きさが示されていると考えられる。

同様に、カテコラミンを使用した全患者数割合も救命救急センターと一般病棟のどちらにおいてもNAD単独群が増加傾向であった理由として、敗血症性ショック以外のショックに対してもNADの方がDOAよりも良好な結果をもたらしているという文献報告がされたためではないかと考える。その文献は、「ショックの治療におけるドパミンとノルエピネフリンの比較」という題目で、2010年3月にThe NEW ENGLAND JOURNAL of MEDICINEに掲載されている。その文献によると、ショックに対し、第一選択の昇圧薬としてDOAを投与した患者とノルエピネフリン(NADと同一化合物)を投与した患者とで、死亡率に有意差はみられなかったが、DOA投与群には有害事象の増加関連が認められたとの報告であった。この結果から、カテコラミン使用割合においてもDOAの使用が年々減少していると考えられる。

【まとめ】

ガイドラインの変遷に伴い、第一選択となる薬剤も変遷していく。薬剤師はガイドラインを随時把握する必要があり、適正な処方提案に努めていきたい。